人生の宝物

松本　真佐子

初めまして、柳田先生。私は今、中一の息子、小三の娘、二児の母です。

私の母は、文読も苦手であり仕事にも追われ、絵本とは全く縁がない。そのような環境で育った記憶しか残っていません。また、そういうものなのだと、ずっと思い込んでいたのかも知れませんね。只、そのような私にも、絵本との出会いがありました。小学校三年、丁度娘と同じ頃です。結核の病を持ち、運動的な行動に重々しく規制がありました。鉄棒すらやってはいけないと注意されたショック、今でも覚えています。体育は、いつも見学。運動好き、得意とする私にはとても刻な事でした。その様子を見兼ねてか、担任の先生から「いわさきちひろ」さんの本を勧められた事を思い出します。文字のない絵だけの本。初めて見た瞬間、疑問を抱き先生に問いました。先生は私を見て笑い、おっしゃったのです。

「この絵を見た、あなたの心の中で感じ得たものが、この絵の話になる。」と。

暗示に掛けられた、その言葉通り一変し、不思議と素直な気持ちになり、心の中で話を読む事ができました。一人の女の子（私）の背に羽があり、誰にも束縛されず自由に羽ばたいている。そこで、私自身、身体で受け止めたもの、感じ得たものが、私の心の中の話です。締めつけられていた胸が緩みフワリ温かくなる。色の優しさから伝えたい事、繊細でいながらも、空想の世界へ引き込まれるような感じがしました。本を広げる度、勇気づけられていたのだと、改めて思い出します。又、その当時、学校の写生会で大阪城を描きました。水彩での色塗りは、今までの自分の塗り方ではなく、変化が生じたのです。担任の先生から「優しい絵ですね。いわさきちひろ流だね。」と誉めて頂いた事、今もはっきりと覚えています。恥ずかしながらも力作で嬉しかったこの頃の私です。この絵本との出会

いがなければ、自分に自信がなく、きっと殻に閉じこもったままだったのかも知れません。そして、今もこの絵本は、私の人生の宝物になっています。

母となり、読み聞かせの聞く側を初めて体験しました。「十二支のはじまり」の本でした。一列に椅子を並べ、子ども達に混じり腰掛けました。読んで下さったのはボランティアさんです。全文を読まず絵を広げ、ご自身で歌詞も取り入れ、子どもにわかりやすい言葉。そして、身振り、手振りで十二支一つ一つを表現していました。一緒になって真似る子、何だろうと、ワクワクしている子、大声で笑う子。子ども達一人一人が、心で読んでいるように、私も又、子どもに返り聞き入っていました。不思議な時間でした。充実感でいっぱいです。本当に楽しかったものですから。本を嫌がる息子の気持ちが理解できたのも、この時からです。私は読む事だけを押し付けていたのです。見る事、聞く事から始めてもよいのではないかと。かつて、子どもの頃に出会い、勇気づけられた絵本のように、きっと得られるはずだと思いました。

もっと、子どもとスキンシップをはかりたい。そのステップが、絵本であり、読み聞かせであると遅かりしながらも気付きました。上手、下手はともかく、子どもを側に寄せ、一緒に居る時間が大事。成長していく子どもと、私もまた、成長していきたいと思います。乱筆ながら読んでくださりありがとうございました。